

牛若と弁慶

楠山正雄

青空文庫

むかし源氏と平家が戦争をして、お互いに勝ったり負けたりしていた時のことでした。源氏の大将義朝には、悪源太義平や頼朝のほかに今若、乙若、牛若、という三人の子供がありました。ちょうどいちばん小さい牛若が生まれたばかりのとき、源氏の旗色が悪くなりました。義朝は負けて、方々逃げかくれているうちに、家来の長田忠致というものに殺されました。平家の大将清盛は、源氏にかたきを取られることをこわがって、義朝の子供を見つけしだい殺そうとかかりました。義朝の奥方の常盤御前は、三人の子供を連れて、大和の国の片田舎にかくれています。清盛はいくら常盤を探しても見つからないものですから困って、常磐のおかあさんの関屋というおばあさんをつかまえて、「常磐のいるところをいえ。いわないと殺してしまうぞ。」

と毎日ひどくせめました。

常磐はこのことを聞いて、

「おかあさまを殺してはすまない。わたしが名のつて出ても、子供たちはまだ小さいから、たのんだら殺さずにおいてもらえるかもしれない。」

と思つて、京都へ出かけました。

ちようど冬のこと、雪がたいそう降つていました。常磐は牛若を懐に入れて、乙若の手をひいて、雪の中を歩いて行きました。今若はそのあとからついて行きました。

さんざん難儀をして、清盛のいる京都の六波羅のやしきに着くと、常磐は、

「おたずねになつている常磐でございます。三人の子供をつれて出ました。わたくしは殺されてもようございませうから、母の命をお助け下さいませ。子供たちもこの通り小さなものばかりでございますから、命だけはどうぞお助け下さいませ。」

と申しました。

親子のいたいたしい様子を見ると、さすがの清盛も気の毒に思つて、その願いを聞きとどけてやりました。

それで今若と乙若とは命だけは助かつて、お寺へやられました。牛若はまだお乳

を飲んでいたので、おかあさんのそばにいることを許されましたが、これも七つになると鞍馬山のお寺へやられました。

そのうち牛若はだんだん物がわかつて来ました。おとうさんが平家のために滅ぼされたことを人から聞いて、くやしがつて泣きました。

「毎日お経なんかよんで、坊さんになつてもしかたがない。おれは剣術をけいこして、えらい大将になるのだ。そして平家を滅ぼして、おとうさまのかたきを討つのだ。」

こう牛若は思つて、急に剣術が習いたくなりました。

鞍馬山のおくに僧正ガ谷という谷があります。松や杉が茂つていて、昼も日の光がささないような所でした。牛若は一人で剣術をやってみようと思つて、毎晩人が寝しずつてから、お寺をぬけ出して僧正ガ谷へ行きました。そしてそこにたくさん並んでいる杉の木を平家の一門に見立てて、その中で一ばん大きな木に清盛という名をつけて、小さな木太刀でほんぽん打ちました。

するとある晩のことでした。牛若がいつものように僧正ガ谷へ出かけて剣術のおけいこをしていますと、どこからか鼻のぼかに高い、見上げるような大男が、手

に羽うちわをもつて、ぬつと出て来ました。そしてだまって牛若のすることを見ている。牛若は不思議に思つて、

「お前はだれだ。」

「といいますと、その男は笑つて、

「おれはこの僧正ガ谷に住むてんぐだ。お前の剣術はまずくつて見ていられない。今夜からおれが教えてやろう。」

「いいました。」

「それはありがとう。じゃあ、おしえて下さい。」

と、牛若は木太刀を振るつて打つてかかりました。てんぐはかるく羽うちわであしらいました。

この時からてんぐは毎晩牛若に剣術をおしえてくれました。牛若はずんずん剣術がうまくなりました。

するうち、牛若が毎晩おそく僧正ガ谷へ行つて、あやしい者から剣術をおそわつていふことを和尚さんに告げ口したものがありません。和尚さんはびつくりして、さつそく牛若をよんで、髪を剃つて坊さんにしようと思いました。牛若は、

「いやです。」

といいながら、いきなり小太刀に手をかけて、こわい顔をして和尚さんをにらめました。

その勢いにおそれて、髪を剃ることは止めました。

牛若はこうしているとまた、

「坊さんになれ。」

といわれるにちがいないと思つて、ある日そつと鞍馬山を下りて京都へ出ました。牛若はもう十四、五になっていました。

二

そのころ京都の北の比叡山に、弁慶という強い坊さんがありました。この弁慶は生まれる前おかあさんのおなかに十八箇月もいたので、生まれるともう三つぐらいの子供の大きさがあつて、髪の毛がもじやもじや生えて、大きな歯がよきんと出ていました。そしてずんずん口をききました。

「ああ、明るい。」

はじめておかあさんのおなかからとび出したとき、こういつていきなりちよこちよこと歩き出したそうです。おとうさんは気味をわるがって、大きくなるとすぐ、お寺へやつてしまいました。お寺へやられても、生まれつきたいそう気のあらい上に、この上なく力が強いので、すこし気にくわないことがあると、ほかの坊さんをぶちました。ぶたれて死んだ坊さんもありました。みんなは弁慶というと、ふるえ上がってこわがっていました。そのうちに比叡山の西塔の武蔵坊というお寺の坊さんが亡くなりますと、弁慶は勝手にそこに入りこんで、西塔の武蔵坊弁慶と名のりました。

ある時弁慶はおもいました。

「宝はなんでも千という数をそろえて持つものだそうた。奥州の秀衡はいい馬を千疋と、鎧を千りようそろえて持っている。九州の松浦の太夫は弓を千ちようとうつぽを千本そろえてもっている。おれも刀を千本そろえよう。都へ出て集めたら、千本くらいわけなくできる。」

こう考えて、弁慶は黒糸おどしの鎧の上に墨ぞめの衣を着て、白い頭巾をかぶり、なぎなたを杖について、毎晩五条の橋のたもとに立っていました。そしてよさそうな

刀かたなをさした人が来ると、だしぬけにとび出して行つて奪うばいとります。逃にげようとしたり、すなおに渡わたさなかつたりするものは、なぎなたでなぎ倒たおしました。

すると、このごろは毎まい晩ばん五ご条じょうの橋はしに大坊主おおぼうずが出て、人の刀かたなをとるといふ評ひょう判ばんがばつと高たかくなりました。

坊主ぼうずではない、てんぐだというものもありました。そしてみんなこわがって、日が暮くれると五ご条じょうの橋はしをとる者ものがなくなりました。

ある時とき弁慶べんけいがとつて来た刀かたなを出だして数かずえてみますと、ちようど九百九十九本ほんありました。弁慶べんけいはよろこんで、

「うまい、うまい、もう一本ほんで千本せんだぞ。おしまいに一いちばんいい刀かたなを取とつてやりたいものだ。」

と独ひとり言ごとをいいました。そしてその晩ばんはわざわざ五ご条じょうの天てん神じんさまにおまいりをして、「もう一本ほんで千本せんになります。どうぞ一いちばんいい刀かたなをお授さずけ下ください。」

といつて、それからいつものように、五ご条じょうの橋はしの下へ行つて立たっていました。

牛若は五条の橋の大どろぼうのうわさを聞くと、

「ふん、それはおもしろい。てんぐでも鬼でも、そいつを負かして家来にしてやろう。」
と思ひました。

月のいい夏の晩でした。牛若は腹巻をして、その上に白い直垂を着ました。そして黄金づくりの刀をはいて、笛を吹きながら、五条の橋の方へ歩いて行きました。橋の下に立っていた弁慶は、遠くの方から笛の音が聞こえて来ると、

「来たな。」

と思つて、待つていました。そのうち笛の音はだんだん近くなつて、色の白い、きれいな稚児が歩いて来ました。弁慶は、

「なんだ、子供か。」

とがっかりしましたが、そのはいている太刀に気がつくつと、

「おや、これは、」

と思ひました。

弁慶は橋のまん中に飛び出して行つて、牛若の行く道に立ちはだかりました。牛

若^かは笛^{ふえ}を吹^ふきやめて、

「じゃまだ。どかないか。」

といいました。弁慶^{べんけい}は笑^{わら}って、

「その太刀^{たち}をわたせ。どいてやろう。」

といいました。牛若^{うしわか}は心^{こころ}の中で、

「こいつが太刀^{たち}どろぼうだな。よしよし、ひとつからかってやれ。」

と思^{おも}いました。

「ほしけりや、やってもいいが、ただではやられないよ。」

牛若^{うしわか}はこういつて、きつと弁慶^{べんけい}の顔^{かお}を見^みつめました。

弁慶^{べんけい}はいら立^たって、

「どうしたらよこす。」

とこわい顔^{かお}をしました。

「力^{ちから}づくでとつてみる。」

と牛若^{うしわか}がいました。弁慶^{べんけい}はまっ赤^かになって、

「なんだと。」

といいながら、いきなりなぎなたで横なぐりに切りつけました。すると牛若はどうに二三間後に飛びのいていました。弁慶は少しおどろいて、また切つてかかりました。牛若はひよいと橋の欄干にとび上がつて、腰にさした扇をとつて、弁慶の肩間をめがけて打ちつけました。ふいを打たれて弁慶は面くらつたはずみに、なぎなたを欄干に突き立てました。牛若はその間にすばやく弁慶の後ろに下りてしまいました。そして弁慶がなぎなたを抜こうとあせつてゐる間に、後ろからどんとひどくつきとばしました。弁慶はそのままとんと五六間飛んで行つて、前へのめりました。牛若はすぐとその上に馬乗りに乗つて、

「どうだ、まいつたか。」

といいました。

弁慶はくやしがつて、はね起きようとしたが、重い石で押えられたようにちつとも動かれないので、うんうんうなつていました。牛若は背中の上で、

「どうだ、降参しておれの家来になるか。」

といいました。弁慶は閉口して、

「はい、降参します。御家来になります。」

と答えました。

「よしよし。」

と牛若はいって、弁慶をおこしてやりました。弁慶は両手を地について、「わたくしはこれまでずいぶん強いつもりでいましたが、あなたにはかかないません。あなたはいったいどなたです。」

といいました。牛若はいばって、

「おれは牛若だ。」

といいました。

弁慶はおどろいて、

「じゃあ、源氏の若君ですね。」

といいました。

「うん、佐馬頭義朝の末子だ。お前はだれだ。」

「どうりでただの人ではないと思いましたが。わたしは武蔵坊弁慶というものです。あなたのようなりっぱな御主人を持つてば、わたしも本望です。」

といいました。

これで牛若と弁慶は、主従のかたい約束をいたしました。

四

牛若は間もなく元服して、九郎義経と名のりました。そしてにいさんの頼朝をたすけて、平家をほろぼしました。

弁慶は義経といつしよに度々戦に出て手柄をあらわしました。後に義経が頼朝と仲が悪くなつて、奥州へ下つた時も、しじゅう義経のお供をして忠義をつくしました。そしておしまいに奥州の衣川というところで、義経のために討ち死にをしました。その時体じゆうに矢を受けながら、じつと立って敵をにらみつけたまま死んでいたので、弁慶の立ち往生だといって、みんなおどろきました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「僧正ガ谷」の「ガ」は底本では小書きになっています。

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

牛若と弁慶

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>